

明治期の地理教科書にみる人種・種・民族

竹 沢 泰 子*

は じ め に

現在でも日本の一部の教科書や事典などにおいて使用され続けている「コーカソイド」「モンゴロイド」や「白色人種」「黄色人種」「黒色人種」という人類の分類方法は、19世紀江戸後期から明治初期にかけて科学知として日本に導入されたものである。前者はドイツ人のヨハン・F・ブルーメンバッハが、後者はフランス人のジョルジュ・キュヴィエが発案した人種区分であった。中世初期から存在していた「人種」と言う言葉の「ひとのたね」という意味を塗り替えて、皮膚の色など可視的な身体形質で人類を分類するという新しい概念が、ヨーロッパやアメリカから日本に越境し、変容を見せながら定着することになった。しかしそれらのすべてが模倣のまま変化を遂げなかったわけではない。日本の国民国家と帝国形成のなかで、その分類方法や意味づけには大きな転換を遂げたものもあった。「人種」と、それと不可分な関係をもつ「民族」は、近代化をめざす日本の紆余曲折、「脱亜入欧」志向、その後のアジアにおける帝国建設において、内政においても対外政策においても等しく重要な役割を果たしていた。教育実践において用いられたこれらの概念とその変遷を考察することによって、言語や宗教といった他の類似した重要な主題と比べても、いかに大きな注意が「人種」に向けられていたかが明示されるであろう。全体的な変遷についてより簡潔にまとめた上で分析する論考は別稿に譲るとして¹⁾、紙幅に余裕のある本研究ノートでは、史料や参考文献の紹介の意味も兼ねながら、人種や関連用語・マイノリティ集団に関する記述を時代系列にしたがって検証する²⁾。

* たけざわ やすこ 京都大学人文科学研究所

1. 訳語としての「人種」

「人種」という言葉自体は、近代よりはるか以前から日本語のなかに存在していた。14世紀転換期頃までに完成していたといわれる『平家物語』や1358年ごろに著された『神道集』でも、「人類のたね」あるいは「ひとだね」という意味で「人種」が用いられている。江戸時代に入り、蘭学者や宣教師を通して欧米の人種学や人種分類を受容し始めると、「人種」はraceの訳語の一つとしてその用法を変えることになった。誰がいつ、最初にこの用語を人類の分類の意味として使用し始めたのかは特定できないが、後述するように、19世紀中葉までには、今日的な意味としてすでに使用され始めていた。興味深いのは、現在は「ジンシュ」と発音されている「人種」の読み方が、幕末から明治初期にかけては、「じんしゅ」、「志`んしゅ」「ひとだね」が交錯していたことである。「人（ジン）」という漢字の第一音節である「ジ」の文字表記に連濁として読む記号を示す「志」が用いられることもあれば、人種という複合語が「ヒトダネ」と読まれることもあった。「ヒトクサ」と読まれている記述も一度だけであるが確認している。すなわち、この時期、江戸後期の渡辺崋山らの翻訳を継承して、“Race”を総称として用いる場合の訳語は「人種」で確立していたものの、その読みはまだ揺らいでいた。人種の下位集団を指す訳語としては、「～人種」のみならず、今日的用法にはない「～種」も用いられている。このことは、人類の分類へと意味を変えた漢字表現の「人種」が、「ジンシュ」という読み方に先行していたことを示している。

これに先立つ中国の歴史では、「人種」という語はどのような意味を帯びていたのだろうか。結論から言えば、中国では、この語は「血統」あるいは「血脈」の意味で用いられることが多かった。たとえば、『靖康傳信錄』（1127年）のなかでは、中国皇帝の血統が途絶えるであろうという一文に人種は用いられている。しかしながら、中国の1750年から1840年に出版された古典的文献のなかで「人種」という語句が使用されているか否かを、「中国基本古籍庫」と「中央研究院漢籍電子文献」のデータベースを用いて検索したが、一例も発見することはできなかった（ちなみに、1750年という数字はヨーロッパにおける人間の分類説が登場する時期を目安に設定したものであり、1840年は日本でraceの訳語として人種という語が初めて使用された時代とほぼ一致している。またこれ以降だと、伝統的な概念なのか、欧米から受容された語句なのか判別できないため1840年よりも前に時代を設定した）³⁾。

ヨーロッパやアメリカの言葉を日本語に導入するにあたっては、すでに中国語で使用されていた、あるいはそれに対応した翻訳語を借用することが一般的であった。加藤周一によれば、このような手法をとったからこそ、江戸時代末期から明治期初頭にかけて（おおむね1850年代から1870年代までの期間）知識人層が西洋の書籍を大規模に翻訳できたのである（加藤 1991: 361-363）。ただし、明治初期に日本で学んだ梁啓超など後に知識人となる中国人留学生が、

「人種」や「民族」を、西洋の科学や文明にかかわる他の語彙とともに日本語から中国語へ転用したのは、20世紀転換後のことだった。

それでは、人種という用語と概念が受容されて間もない明治初頭、そもそも“race”の翻訳としていかなる日本語が充てられたのであろうか。まず“race”の訳語であるが、これら原典の“race”の用法には、人類を区別する総称の場合と、“Mongolian Race”や“Caucasian Race”などの個別の人種を指示する場合がある。総称としては、ほぼ例外なく「人種」という漢字が充てられている。

英語の“race”やドイツ語の“rasse”，フランス語の“race”などは多義的で、その日本語訳も単一ではなく文脈に応じて変化してきた。日本の一部の研究者たちは、少なくとも明治前半において、「民族」「種族」「種」などといったさまざまな訳語が入り混じっており、現在の意味での人種が流通し始めたのは1890年頃であったと論じている。またそれ以前は「同種の人々」を意味する曖昧な概念に過ぎなかったという主張もある⁴⁾。しかし明治初期のこうした翻訳語の揺らぎは否定できないものの、少なくとも今日的な意味の「人種」の系譜に連なる明治初期の地理学の教科書に焦点を絞れば、こうした主張とは異なり、「人種」という言葉が人類の分類の総括的名称として用いられることが一般的であった。

さらに筆者の調査では、明治期初期の地理の書籍のなかで「民族」が（人間を分類する一般的用語としての）「人種」の置き換えとして用いられている文章を目にすることは、ほぼ全くとっていいほどなかった。「士農工商」などの身分として「民族」が用いられた事例を一件見つけることができたが⁵⁾，“race”の訳語としての使用例は見当たらず、そもそもこの語自体が基本的に用いられていなかったことが確認された。この調査結果は、1880年代後半まで「民族」が現代的な意味で流通することはなかったという尹健次の議論とも符合している（尹1994）。現代的な意味での「民族」が全国的に普及するきっかけとなったのは、1888年の雑誌『日本人』と新聞『日本』の創刊であった。たとえば、『日本人』の第1号は、「大和民族と日本人の一千年以上の伝統」を呼び覚ます明らかにナショナリスティックな文章で始まっている。このように、「民族」はナショナリズムと分かちがたい関係を少なくともその誕生時に孕んでいた。

2. 明治以前——渡辺崋山

日本で最も早く今日的な意味での人種と人種分類について書物に残したのは、知られている限り、江戸時代後期、画家・文人で蘭学に精通していた渡辺崋山である。明治維新の30年前に発表した1838年の『慎機論』のなかで、早くも人類の区分として、「ダルダリス（Tartar）」「アチラピヤ（Ethiopian）」「モンゴル（Mongolian）」「カウカス（Caucasian）」があると論じてい

る。ダルダリスを除く3種は、ヨハン・F・ブルーメンバッハの5分類に属し、「モンゴル種」「カウカス種」はブルーメンバッハの命名に準じていることから、華山が当時ヨーロッパですでに定着していたブルーメンバッハの命名と分類を受容していたことが窺える。しかし、ブルーメンバッハは、タタール人についてはコーカサス人の一部に過ぎないと主張していたことから、華山の4種の分類は、ブルーメンバッハとそれ以前の分類を混同したものであると思われる。華山は続いてリンネを引用し、「西洋はカウカス種、我國はダルダリの種に属す」(8)との注意書きを加えており、「我國」はモンゴル種とは異なる種であると解釈していた。

翌年発表した『外国事情書』(1839年)では、(高北海以東^{イトウ}(^{ヨリヒ})ノ人種ハ〈洋人共、コレヲ「モンゴル」種トモ、^{*}「ダルダリ」種トモ称シ、□皇国・唐山迄^{そのしゆ}其種ニ入^{いれ}申候〉黒髪黒眼ニテ勇力有^{これ}之^{あり}、車馬ヲ以テ水草ヲ逐^おヒ、移住^{イデウ}(^{ウツリ})^{つかまつり}仕^ス、) (1971[1839]:18)とあり、「人種」という言葉の使用のみならず、モンゴル種等の定義も含めて、ブルーメンバッハの5分類の影響が『慎機論』よりも顕著に認められる。

華山がこのように広く海外に目を向け、人々の風貌や特色、暮らしぶりをはじめとする外国事情について著したのは、単なる好奇心からだけではなかった。「五大洲之内、亜細亜之外は、洋人之領地と相成候。其亜細亜之内も、唐山、百爾西亞、我□邦之三国計、洋人之穢を受不レ申候得共、唐山は已北狄之有と相成候得者、唯我邦・百爾西亞之二国のみ、古来独立仕候。」(世界五大州中、アジアをのぞく諸州は、ことごとくヨーロッパの所有に帰している。そのアジアのなかでも、「洋人之穢」をまぬがれているのは、唐山(中国)、ペルシア、わが国の三国のみである)(ibid. 49)と、ヨーロッパのアジア、とくに日本進出への動きを憂慮していた。華山は、佐藤昌介が「華山が蘭学を研究するにつれて、深刻な危機感をいだくにいたったのは、このような認識のゆえであった」と述べているように(佐藤 1971: 631)、世界についての科学知識を裏付けとして、日本に迫り来るヨーロッパの影を察知し、危機感を募らせていた。

ちなみに中村紀久二によると、江戸時代前期から、事実上、初等教育の役割を果たした寺子屋が登場し始め、19世紀に入るとその数は急増し、幕末期には全国で3万から4万の寺子屋が存在したとされる(中村 1992: 2-3)。寺子屋では「往来物^{おうらいもの}と呼ばれる教科書が用いられていた。往来物とは、手紙の模範文を編集した初期の学習用教材であり、師匠の書いた書き手本が用いられた。後述する福澤諭吉の『世界國盡』も往来物の体裁を保っている。

3. 明治初期

1868年の明治維新の後、日本政府が近代化に向けて着手した事業の一つは、「不学の世帯をなくし、家庭のなかに不学の人がなくなることを期待する」とする初等教育の普及徹底であった(中川 1978: 11)。政府は近代的な学校制度を確立させるために、明治5(1872)年、俗に

「學制」と呼ばれる大政官布告を公布した。これによって、全国を大中小の三つのレベルに細分化し、一小学区に小學校を一校ずつ建設するといった近代国家としての公教育制度の土台づくりに着手することになった⁶⁾。

新教科書を新しい学校制度のもとで作成するにあたって政府が方針としたのは、明治政府が文明開化の手本とする欧米で使用されている教科書と同様の趣旨で編集されなければならないというものであった。中村紀久二は、明治初期の地理歴史教科書の特徴として、「維新前の「支那」に対する尊敬は全く消滅し、欧米に対する関心の強さから対アジア、特に「支那」については偏見侮辱の態度を示していたこと」を指摘している（中村 1984: 65）。「脱亜入欧」が、明治維新後、学校教育においても積極的に進められたのである。

とはいえ日本国内で直ちに欧米同様の趣旨の教科書を作成することはできず、明治初期の教科書は欧米から輸入した教科書の翻訳・翻案が大多数を占めた。そのため教科書史のうえでは「翻訳教科書時代」といわれている（中村 1984: 49）⁷⁾。それらの中には、英語の単語と併記して、その発音を下に仮名書きするものさえあり、日本語の文章にさえないものも多かった。ある研究によると翻訳教科書は、文学関係書を除くと、人文科学 456 種、社会科学 747 種、自然科学 609 種、その他 254 種の書物、小・中学校用教科書 341 種、教材参考書 77 種にも上ったという（ibid. 49 より引用。原典は尾形裕康『西洋文明移入の方途』野間教育研究所紀要第 19 条）。

明治 5 年(1872)に公布された「小學教則概表」（図 1）によると、地理読方は 5 級（7 歳半）から、地理学輪講は 3 級（8 歳半）から導入されるが、3 級以降は算術に次いでもっとも時間数が割かれた教科であり、文部省が地理教育をいかに重視していたかが窺える⁸⁾。

「小學教則」において「地學讀方」「地學輪講」の科目に使用する教科書として例示されていたものは、以下の 5 冊である（中川 1978: 38）⁹⁾。

瓜生寅『日本國盡』（1872 年 明治 5 年）

福澤諭吉『世界國盡』（1869 年 明治 2 年）

内田正雄『輿地誌略』（1870-1880 年 明治 3 年～13 年）

松山棟菴『地學事始』（1870 年 明治 3 年）

市岡正一『皇國地理書 初編ノ上』（1874 年 明治 7 年）

これらのうち、『日本國盡』と『皇國地理書』は、日本地理の書物であり、人種に関する記述は見当たらない。外国地理の普及に大きな役割を果たしたのは、大ベストセラーとなった『世界國尽』と『輿地誌略』である。

小学教則概表
(明治五年十一月十日
文部省布達番外)

図1 http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318006.htm

『世界國盡』（福澤諭吉「譯述」）

『世界國尽』は、福澤が幕末に欧米諸国を周遊している間に購入した世界地理書・歴史書の一部を翻訳したものである。「著しい普及を見た啓蒙書であると共に教科書としても広く使用

され」（海後 1965: 622）たため、一説には 100 万部刷られたという（中川 1997: 5）。

『世界國盡』の原著には、福澤自身「福澤諭吉 譯術」と書いており、後世でのこの書を彼の名著とする扱いとは異なり、英米の書物が原典であることを明記している。ただし、その原著となる具体的な書物や著者は記されていない。凡例には、「此書は世間にある翻譯書の風に異なれとも其實は皆英吉利亞米利加にて開板したる地理書歴史類を取集めその内より肝要の處だけ通俗に譯したるものにて私の作意は少（旧字体）も交へす」と記しており、「肝要の處」だけを抜粋して翻訳した本であると強調している。

第 1 巻から第 5 巻は、「亜細亞の人種」、「阿弗利加の人種」、「歐羅巴の人種」、「亞米利加の人種」（南北アメリカ）、「大洋州に住へる島人」（オーストラリア）の人々といった世界の「5 種」に対応して、それぞれの地理、歴史と人々の生活の様子を説明している。続く附録では「地理學の總論」が収められ、その冒頭は「世界中の人種を五に分ちその容貌知愚同じからざれば國々の風俗生産の道も亦一樣ならず」と記している¹⁰⁾。世界の 5 つの人種の人々がどの程度の数、どのような地形や気候のもとに住み、その知性の程度はいかなるものか、そうした違いがそれぞれの国家の風俗や生業の営みにどのような違いをもたらしめているのか、といった知識を習得することに関心を向けている。そのため地形や気候よりも、むしろ人々の生活水準や気質についてより多くのページが割かれている。福澤が参照した原著は、おそらく当時の欧米の地理書からすると、ヨーロッパに関する記述が第 1 巻を占めたと思われるが、日本の読者の関心にあわせて、中国や中国人に関する記述とイラストが中心を占めた亜細亞州を第 1 巻にした。

『輿地誌略』（内田正雄）

『輿地誌略』は、明治 3 年から明治 13 年にかけて出版された 4 巻 13 冊からなる世界地理書である。明治 7-8 年の時点での印刷部数は、約 12 万ないし 15 万冊にすでに達していたとされる（増野 2006: 59）。『輿地誌略』は、上等小学第 7 級から第 1 級までの「地學輪講」の教科書として指定されているが、実際には、教員養成の最高峰にあった東京師範學校においても「地學」の教科書として用いられていた（中川 1997: 46）。海後宗臣はこれらの復刻版への解題において、「世界國盡は著しい普及を見た啓蒙書であると共に教科書としても広く使用された」とし、また内田の『輿地誌略』については、「当時これが唯一の日本人の手によって刊行された世界地理書であったために、広く読まれた書籍の一つとなった」と評している。（海後 1965: 623）

のちに文部省官僚となった内田正雄は、1863 年（文久 3 年）に渡欧し、まずオランダに留学し、その後 1886 年（慶応 2 年）に帰国するまで、オランダを中心に諸外国で地理に関する書籍や資料を収集した。また『輿地誌略』は、それらの書物やその後の世界一周旅行の経験などに基づいて著した官番世界地理書である。同書の中に多数掲載されている挿絵は、19 世紀中頃

にフランスで創刊された年刊誌「『ルツール、ジュモンド』世界各地ノ旅行記ノ類」に挿入されている図版を模写したものであった（増野 2006: 50-51）¹¹⁾。『輿地誌略』は、小学校から中等学校の教科書であり、さらに一般向けの啓蒙書としての役割も果たした（海後 1965: 622-624）。

序文で主たる参考文献の著者の一人として挙げている「ゴールドスミス」とは、イギリスの小学校で広く使われていた地理教科書 *A Grammar of Geography for the Use of Schools, with Maps and Illustrations* (1868) の著者であり、ロンドンの宣教師であった J. Goldsmith を指す。同書は、当時の海外の地理書が同じく、中国や中国人の記述に紙幅を割いたのとは対照的に、日本については、地理、鎖国の歴史、天皇制に関する記述に限られている。とはいえ同書は、日本人に関して「かなりの程度の文明と製造する技術を持っている」(p.103) と短く言及している。こうした海外での高い評価が、当時これらの原著に触れた知識人らの日本人としてのプライドに多少なりとも影響を及ぼしていた可能性がある。

『輿地誌略』では、世界の5大陸のおよその人口とともに、「人種ノ區別」として「莫古種 (Mongolian)」「高加索種 (Caucasian)」「以日阿伯啞 (Ethiopian)」「巫来由種 (Malay)」「亜米利加種 (American)」という「五種」の、それぞれの居住地域、人口、外見的特徴、文明開化の程度が紹介されている (p.26)。この5分類は、明らかにブルーメンバッハの5分類を踏襲したものである。『輿地誌略』においても、「五種の區別」として、それぞれの皮膚の色については、たとえば莫古種は「又黄人ト名ク」とあるが、皮膚は「黄土色或ハ褐色」とあり、今日理解されているような「黄色」と描写されているわけではなかった。それぞれの種類については、「高加索種」のように「種」を用いながらも、この節の見出しにある「世界人口ノ大畧及ヒ人種の區別」や「此人種ニ属スルモノ、…」に象徴されるように、総称として「人種」が用いられている。また続く本文中でも繰り返し「人種」が用いられている。ちなみに、1巻の人口の記述から教法までの人種に関する記述においては、言語文字、教法（宗教）に関する項目が続くが、「民族」という言葉が使用されていないことは留意しておくべきであろう。

松山棟菴の『地學事始』

松山棟菴による『地學事始』(1870年 明治3年)は、アメリカ合衆国で出版されていた何冊かの地理書歴史書を部分的に訳し1冊にまとめたものである¹²⁾。人種については、第1巻の冒頭で、世界人口に続き、「頭蓋骨の形状と皮膚の色合」によって、高加索人種、蒙古人種など、5つの人種に区別できると説明している。頭蓋骨の形状や5分類の名称への言及から、ブルーメンバッハの影響が明らかに認められる。一方、開化、半開、未開などの文明の度合いや気質についての記述は見受けられない。

上記の5冊は、明治初年から6年にかけて出版されていた地理書のなかで、すでに高い評価を得ていた著書が教科書として暫定的に指定されたものであった。明治6年までは、国内に体

系立って記述された地理の入門書がなかったため、欧米で広く普及していた教科書を翻訳して使用していたからである¹³⁾。これらの緒言や凡例を見る限り、その原典として最も頻繁に用いられたのが、後述するように、アメリカ人のコーネルおよびミッチェル、イギリス人のゴールドスミス、オランダ人のカラムルスによる地理書であった。ただし、出版年や、著書のタイトルさえ記載されていない場合が多い。

上記以外に、師範学校（田中義廉編『小学読本』（明治6年 原著 M. Wilson, *The First [-Sixth] Reader of the School and Family Series*）も、明治初期の代表的翻訳・翻案教科書の一冊とされている。明治18年まで多くの府県で翻刻出版され、『文部省雑誌』所収の文部省蔵版教科書の府県翻刻部数一覧において、『単語篇』に続く第2位の地位を占めたほど広く普及した本のひとつであった¹⁴⁾。この『小学読本』の第1巻第1章の巻頭には、「凡世界に住居せる人に五種あり ○亜細亜人種 ○欧羅巴人種 ○マレイ人種 ○亜米利加人種 ○亜弗利加人種なり ○日本人は亜細亜人種の中なり」と記述されており、小学児童に暗誦させたという（中村1984: 55）。本文とともに掲載されている巻頭の挿絵は、原著とされるウィルソンの本ではなく、中



図2 S.S. コーネルの *High School Geography* (1860) にみられる5人種の挿絵



図3 福澤諭吉の『西洋事情』(1866)にみられる挿絵

村によると、S.S. コーネルの *High School Geography* (1860) に依拠した可能性が高い。ただし、『小学読本』では、支那人を日本人に変え、5人種の位置や顔向きを変えている。コーネルの上記の米国教科書にみられる5人種の挿絵(図2)は、福澤諭吉の『西洋事情 初編一』(慶応2年)(図3)や吉川正雄『挿絵 智慧の環二編上』(明治3年)などにも転用されたという(中村 1984:58)。ちなみに、明治3年(1870年)に出版された『地學事始』でも、イラスト付きで、ブルーメンバッハの5人種や、白種が1等、黄種が2等、黒種が3等とするキュヴィエの3分類が紹介されている。

『百科全書 人種篇』(文部省)

明治7年(1874年)、教科書における人種に関する指導の手引きの一つとなった『百科全書 人種篇』が文部省によって出版された。原典はチェンバース兄弟(William and Robert Chambers)による *Chambers's Information for the People* で、秋山恒太郎が翻訳した。同書では、ドイツ人ヨハン・F・ブルーメンバッハ(Johan・F. Blumenbach)、フランス人ジョルジュ・キュヴィエ(Georges Cuvier)、イギリス人ジェームス・コウルズ・プリチャード(James Cowles

Prichard), アメリカ人ダニエル・G・ブリントン (Daniel G. Brinton) といった当時の代表的な人種学者の議論が参照されており, この本の出版をもって日本における人種学の幕開けとされている。ブルーメンバハの5分類やキュヴィエの3分類は, イラスト付きで教科書にしばしば登場している。

これらは, 一般読者用に書かれたものであったことから, その後, 文部省は新たに日本地理と外国地理の3部を師範学校において編集し, 教科書として刊行した。このうち外国地理の教科書として用意されたのが, 管野虎太訳の『萬国地誌略』6巻3冊 (明治7年/1874) であった。

明治7年に文部省から『萬国地誌略』が出版されると¹⁵⁾, 日本地理用の『日本地誌略』とともに, 小学校の地理書として最も用いられるようになった。

凡例によると, アメリカ人コルトン, アメリカ人ミッチェル, イギリス人ゴールドスミス (ママ)らの名前が記載されており, 彼らによる地理書を抄訳して, 小沢圭二郎が編集した。海後は「編集者のもっていた方針によって, 日本の小学校で用いられる外国地理教科書としてまとめたところに本書の特質がある」とこの本を特徴づけている (海後 1965: 626)。さまざまな風景とともに, 異なる人種とされる人々がイラストで描かれている。

開化の等級

文明開化が盛んに謳われた明治初期, 海外諸国や日本の文明の度合いについて, 地理教科書はどのような記述していたのだろうか。福澤諭吉の『世界國盡』における文明開化の4段階への分類は, 翻訳書におけるひとつのモデルを構築したと考えられることから, 以下で詳細にその議論を見ていく。

「開化の等級」をめぐる議論では, 世界中の人々を (い) 文明開化 (ろ) 蛮野に区分した後, さらに細分類化した。第一の「渾沌」は, 蛮野のなかでも「最も下等の民」であり, 「人の肉を喰ふ」ものもあり, 互いに争い, 文字も法律も礼儀も知らない人々である。例としてアフリカの内地やオーストラリアなどの「土人」が挙げられている。第二は, 「渾沌の民よりも一段上席」で, 支那の北方の韃靼 (Tartar), アラビア, 北アフリカの「土人」などを指し, 定住の家をもたず, 文字社会ではあるが読み書き能力を備える者が稀で, 親分と下々の者の間に明確な序列が存在している。第三は, 文明開化と蛮野の中間に位置する「未開または半開」である。第四は, 礼儀を重んじ, 人情も穏やかで, 学問や芸術, 農業も盛んな, 「文明開化」であり, アメリカ合衆国, イギリス, フランス, ドイツ, オランダを想定している (福澤 1869 (第6巻): 14-17)。

中国については, その人口, 面積, 首都北京, 男性の「坊主」(弁髪) について触れた後, 「真實に國の為を思ふ者なく遂に外国の侮 (外国から侮辱) を受ける」 (福澤 1869 (第7巻): 7-8)

と記述し、イギリスへの敗北とそれに伴った賠償金と香港譲渡にも触れている。

それでは、文明開化のヨーロッパはどうであろうか。

「当時（現在の意味）欧羅巴は文明開化世界第一とて相違なきことなれども、往古は（昔は）矢張渾沌無智、追々開けの進むに及でも、中古は封建の世とて専ら武を重んじ、（中略）二、三百年以前より学問の道漸く行われ、世の人皆智を貴で力を恐れず、国の政事も自然にその辺に基きて、次第に今日の有様に至りしなり。」（福澤 1869: 97）

福澤はこうした「外国の侮」を受けた中国や、太古は未開であったものの文明開化に至ったヨーロッパ、またその他の文明の度合いの異なる人々についての事情を紹介することによって、日本の外で生じつつある現実を目を向けさせ、危機意識を抱かせようとしたのだろう。

そこで注目したいのが、福澤がこの本の序文で書いている次の一文である。「専ら児童婦女子ノ輩ヲシテ世界ノ形勢ヲ解セシメ其知識ノ端緒ヲ開キ以テ天下幸福ノ基ヲ立テントスルノ微意」。すなわち欧米列強の進出を射程に入れつつ、日本が隣国中国など他のアジアと同様の禍の運命を辿るか、あるいはヨーロッパのように文明開化し幸福を得るか否かは、国の将来を担う児童やその養育にあたる女性たちの知識と知恵に委ねられていると考えていた。

その後の翻訳書では、欧米の原書に倣い「開化の等級」という項目が設けられ、「蛮夷」「未開」「半開」「文明開化」といった小項目には、それぞれ簡単な定義と例となる国名が記されるのが一般的であった。しかしそれらに加えて、「其他文明ノ國」という小項目が立てられることもしばしばあった。例えば、前述の『輿地誌略』（明治4/明治8/明治13年）では、4項目に続いて、憲法が存在、君主による土地の非私有化等によって定義づけられた「其他文明ノ國」が加えられている。いずれの版も、「半開」の例として、支那、シベリア、トルコを挙げ、「文明開化」の例として欧米を挙げている。「其他文明ノ國」に例は挙げられていない。「開化の等級」に日本の国名が含まれた事例は、他の箇所も含めて見受けられなかった。しかし明治15年版になると、「わが国の開化は昔から国の西の隅から東の隅に至んでいる」といった、文明開化に対する高い自負を匂わせる記述が見られるようになる（p.30）。

欧米の原書と翻訳

それでは欧米の原著では、日本の開化の度合いについて何らかの言及はあったのだろうか。ここで、洋書を日本向けに翻訳した際、人種や民族、文明に関する記述にどの程度手が加えられているのかを、可能な範囲で対照させながら吟味したい。前述の大ベストセラーとなった『輿地誌略』の凡例には、今回吟味したいいずれの版にも「マッケー、ゴールドスミス、カラームスの地理書に依りて」（p.1）と書かれている¹⁶⁾。マッケーとは、スコットランド人の

Alexander Murdoch MacKay を指すと思われる、原著であると推測される書物には¹⁷⁾、人種に関する記述はあるが、文明の程度に該当する議論は存在しない。カラムルスとは、石山洋によると、Jacob Janszoon Kramers を指し、内田の留学先であったオランダで書かれた *Geographisch-Statistisch-Historisch Handboek* が参照された。同書は、特に幕末期、最新の世界地理便覧として、日本でも広く利用されていたという。『輿地誌略』の「総説」と「邦制部」は、Kramers の本書の一部を要約したものである（石山 1967: 10）。イギリス人 J・ゴールドスミス師（Rev. J. Goldsmith）の原典は、*A Grammar of Geography for the Use of Schools, with Maps and Illustrations* であると想定される。この本には、当時の他の多くの書物のように出版年が記載されておらず、数多くの版があることから、翻訳に使用された版を特定するのは難しい。とはいえ 3 つの版¹⁸⁾を検証したところ、“civilisation in its different degrees”のなかで、人類は以下の三つの文明の程度に分けられている。

- 1 Roving tribes and fishers（流浪する部族^{トライブ}¹⁹⁾と漁民）
- 2 Wandering pastoral tribes（放浪する牧畜部族^{トライブ}）
- 3 Fixed nations（定住する民族）

日本人は中国人らとともに第 3 に含まれており、日本人と中国人の文明の差についての記述は見られない。原著でも翻訳書でも、蒙古種に日本人が含まれることは明記されているので（p. 27）、人種分類がかならずしも、即、文明の等級を表すと考えられていなかったのだろう。

このほか、当時『萬國地理誌』（明治 10 年）などで、原著者としてしばしば名前が挙げられたハルペルとは、*Harper's School Geography, With Maps and Illustrations* の著者であるリッター・ハーパーとフンボルト・ハーパーと推定される。翻訳の元となった版を現時点では入手できなかったが、1878 年版および 1886 年版では、“condition of society”と題した項目で、社会条件により 5 つの等級、すなわち savages, barbarians, half civilized nations, civilized nations, enlightened nations に区分できると説明している²⁰⁾。しかし日本や支那への言及はなく、日本がどのように位置づけられていたのか、この等級だけでは不明である。他方、国別の記述における日本をみると、そこでは日本人と中国人との差異が強調されている。

Although the Japanese live so near the Chinese, they are a very different kind of people. They are more intelligent, and do not have so many odd notions. The Chinese dislike foreigners, and have learned very little from them ; but the Japanese welcome Americans and Europeans, and make use of their inventions, such as railroads and telegraphs. (p. 99)

日本人は中国人と隣人だが、彼らは非常に異なる種類の人々である。日本人はより知的であり、それほど多くの奇妙な観念を持っていない。中国人は外国人を嫌っており、外国人からはほとんど学ぼうとしない。一方、日本人はアメリカ人とヨーロッパ人を歓迎し、鉄

道や電信など彼らの発明を利用している。

日本人は、より知的で、さほど奇妙な考え方を持たず、アメリカ人やヨーロッパ人を歓迎する、また様々な欧米の発明を利用するなど、中国人と対比させながら概ね肯定的に描かれている。

Chambers's Information シリーズは、初版 (1833-35) から第 5 版 (1874, 1875) まで版を重ねている²¹⁾。人種篇の翻訳に用いられた底本がいずれの版かについては諸説あるが、アメリカ版だと断定する石川説がもっとも説得的である (石川 2013: 300)²²⁾。ほぼ完訳ながらも、その訳語には厳密に言えば興味深い手が加えられている。そもそも『百科全書 人種篇』は、1 頁から始まる総論的な “Physical History of Man-Ethnology” のなかの一部の記述にすぎず、タイトル「人種篇」もその一部の見出しに依拠している。人類にはひとつの種しか存在しないこと、しかし数多くの変異が見受けられ、その明確な分類は不可能であること、便宜上ブルーメンバッハの分類にしたがって 5 つに分けていることといった内容は、概ねそのまま翻訳されている。また、variety は、訳語では「ヴィリティー」とルビを振られながら、「人種」と訳されている。変異を意味する “variety” と、固定的な分類を含意する “race” との大きな意味の違いをどの程度、当時の地理学者や知識人が理解していたかは不明である。とはいえ少なくとも人類の区分としての “race” の訳語として「人種」という言葉が、渡辺崋山によって導入されて以来、明治初期までにはある程度すでに確立していたことが窺える。

しかし、各論の “Mongolian Race” になると人種の意味が異なる。原典では弁髪を結った中国人男性のイラストとともに、次の文章で始まっている。

The high lands of Central Asia, from the southern skirts of which the Indo-European and Semitic races appear to have descended, are thought to be also the original seat of a great cluster of nations, chiefly nomadic or wandering, which now people Tartary, Mongolia, and Russia in Asia, and of which the Turks are an offshoot. . . . With them other inquirers class the vast horde of Chinese and Japanese population, as well as the tribes spread along the shores of the Arctic Ocean, in Asia, in Europe, and America, calling the whole Mongolian, in order to distinguish them as a separate race.

中央アジア高地は、その南部のふもとからインド・ヨーロッパ語族 (race)、およびセム語族 (race) の人を出現させたように見えるが、元々は、トルコ人を派生させたアジアにおける今日のタルタル人、モンゴル人、ロシア人といった遊牧民や移動民の主な集団が寄せ集まって暮らしていた場所でもある。…学者たちは、彼らを一つの異なる人種として区別するために、中国人と日本人の大群およびアジア、ヨーロッパ、アメリカ大陸にまた

がる北極海海岸沿いに住む部族をすべてモンゴリアン（蒙古人）と呼ぶことにした。

日本語版では、上記のそもそも誰がモンゴリアンであるかを指した第1パラグラフがすべて省略されており、いきなり皮膚の色、毛髪の色や形状、目鼻頬の特徴と続く第2パラグラフから始まり、それは比較的忠実に翻訳されている。そこでは The Fins（フィン人）をはじめとする5人種については言及されているが、Japanese という呼称は現れない²³⁾。こうしたそれぞれの人種の分布を記した第1パラグラフおよびイラストは、その他の4人種についても翻訳書では同様に省略されている。したがってこの消去が、日本人の位置を不明瞭にするために意図的に行われたかどうかは不明である。とはいえこの議論の舞台から除外されることによって、日本人という主体の位置が完全に不可視化されていることは確かである²⁴⁾。

次に、初期の地理書や最初の教科書で原典として最も頻繁に用いられたミッチェルの原書とその翻訳書を可能な範囲で比較してみる。ミッチェルの「モダン・ジェオグラフィ」とは、Augustus Mitchell による *Mitchell's Geographical Reader: A System of Modern Geography, Comprising a Description of the World* を指すと思われるが、どの版を用いたかは不明であり、ここでは1840年版を暫定的に参照する。

ミッチェルの本が主たる原典であると凡例で明記している『萬國地理誌』（明治10年）の場合、ほぼ2頁にわたる「世界人種ノ別」では、蒙古種に関する記述は次の一文のみである。「蒙古種は黄色人種と称する。亜細亜の東北に居住している」。ここでも、日本は言及されておらず、イラストでは、中国人男性が描かれている。「世界人種ノ別」に続いて、「人民開化ノ等級」と独立した節が翻訳書では設けられている。しかし今回確認した版のミッチェルの原典では、各地域あるいは国別に記述がなされており、そこで savage（野蛮）、civilized（文明）、また場合によっては half-civilized（半開）などの概念を用いた記述があるものの、「人民開化ノ等級」に該当する節は見いだせない。ミッチェルでは、アジア全体についてその大半が savage か half-civilized であると述べている箇所があるが、それに該当する記述は日本語版では見当たらない。それでは翻訳書にのみ設けられた可能性がある「人民開化ノ等級」に、日本人の等級なるものが書かれているのかというと、ここでも日本人は言及されていない。むしろ一般論として世界の人々の文明が4等級に分類できるとあるものの、具体的にそれぞれの等級がどの地域の人々やどの人種を指すかは不明瞭なままなのである（p.10）²⁵⁾。

他方、1840年版を見る限り、ミッチェルの原典において日本人に関する記述は亜細亜の最後の4頁に限られている。その冒頭は、“Japan is a flourishing and populous empire, situated on the eastern confines of Asia.” から始まる。また“The Japanese are among the most industrious nations of Asia.”とも書かれており、日本が帝国として繁栄していること、アジア

の中で最も勤勉な国民であることなど、比較的肯定的に描かれている。外見的特徴に関しては、
 “Their complexion, a yellowish brown, appears to be produced by climate only, since ladies, who are constantly protected from the heat of the sun, are as fair as in Europe.”

すなわち、「黄褐色の顔色は、気候によってのみ生み出されているようである。日光に当たることを常に避けている女性の皮膚の色は、ヨーロッパ人のように白いからである」と記述している。こうした解釈は、本来のブルーメンバッハの環境決定論を支持するもので、後年の日本人の皮膚の色が「黄色」である解釈とは大きく異なるものである²⁶⁾。

ゴールドスミスとは J. Goldsmith のことで、原典は、*A Grammar of Geography for the Use of Schools, with Maps and Illustrations* を指すと思われるが、この場合もどの版に依拠したかは特定できない。たとえば 1843 年版と 1868 年版では内容の充実度に大きな差があるが、数頁のみの総論と、それに続く詳細に分けられた世界各国の地理や産業、人々の生活の概要というフォーマットはほぼ変わってない (p.605)。

今回確認した版のゴールドスミスの原典においても、各地域あるいは国別に記述がなされており、そこで savage, civilized, また場合によっては half-civilized などの言葉で形容した記述があるものの、「人民開化ノ等級」に該当するセクションは見いだせなかった。

前述の通り、ミッチェルやゴールドスミスらによる書物はいずれも翻訳書の主たる原典となっていた重要な書物である。1 対 1 の翻訳でないために、確定した結論を導き出すことは不可能であるが、現段階で以下については明らかになった。すなわち、別途日本地理書が刊行されていたために、それらに依拠した翻訳書では日本に関する記述が通常省略され、客体としての他国の地理や人口、人種、その風俗等について淡々と学ぶという構成になっていた。結果として読者は、原書にほとんど登場することのない日本人に対する欧米人のまなざしや日本の位置づけに関してほとんど意識させられることはなかった。さらに、蒙古種に関する記述において日本が言及されている事例がほとんど見られず、イラストの典型として中国人が取り上げられていた。むしろ、原書に触れる機会のあった地理学者や知識人らは、中国人が蒙古人種に分類されていたことから、日本人の蒙古人種への分類についてもある程度把握していたと思われる。しかし、明治初期の地理教科書の記述からは、日本人がいったいどの人種に分類されているのか、あるいは 5 人種のいずれかに属するのか、あるいは属さないのかについては、多くの場合、きわめて不明瞭な記述内容に終わっていたと判断しても間違いではないであろう。

同様に、文明の等級についても、中国や他のアジア諸国に対して叙述されていた半開あるいは未開という分類に日本も含まれると主体的に記述していた例は見いだせない。文明の度合いに関して日本が名指しでランク付けされているのは、現時点の調査ではミッチェルの書物に限られており、結論づける段階には至っていない。しかし少なくとも、類書の日本に関するやや好意的な記述を目にした当時の地理学者や知識人は、日本と隣国支那との違いが教科書の記述

に及ぶまで欧米社会において十分に認識されていたと解釈し、文明開化の自負を深めていたに違いない。

このように、明治初期に刊行された教科書、とくに外国地理書のなかでは、「人種の区別」は、原則的に世界総人口に続いて冒頭を飾るきわめて重要な位置を占めていた。英語の“race”にはいくつもの訳語が存在してきたことは事実だが、明治の初期に「人種」という用語が一般には浸透していなかったという一部の研究者の主張は正確ではないと言わざるをえない。“race”の訳語として、人類を区別する総称の場合は、ほぼ例外なく「人種」という漢字が充てられており、Mongolian Race や Caucasian Race などの個別の人種を指示する場合は、「～人種」「～種」も用いられている。

一方「民族」という語は明治初期にはほとんど登場せず、記載されている場合でも今日的な意味では用いられていなかったことが確認された。

5. 明治 10 年代

明治初期は、日本地理と外国地理はそれぞれ別の教科書が編集されたが、明治 10 年代に入ると、双方を合わせた総合的な地理の教科書が作成されるようになる。『近代教科書の変遷』では、明治 10 年代のはじめに使用された主な教科書として、次の 3 冊が挙げられている。

山田行元編 『新撰 地理小誌』4 巻（明治 12 年）

南摩綱紀編 『小学地誌』3 巻（明治 13 年）

福島県学務課編 『地理提要』2 巻（明治 13 年）

山田行元編の『新撰 地理小誌』巻 1 で、地球儀から入り、世界地理と日本地理を概説し、巻 2 は日本の地理、巻 3・4 が外国地理に関する説明である。北米を最も文明開化したとみなしており、同時に、福澤らの文章と同様、文明開化することが幸福を得ることだと考えられていたことがわかる。「中にも北亜美利加の人は最開化進み最幸福を得たり」（山田行元編『新撰地理小志』（山田仙（出版）（明治 17 年版：8））。南摩綱紀編の『小学地誌』は、全体的に日本の地理を教授するものだが、巻 1 は、総説に続いてアジア州概説が述べられ、そのあとに日本の概説が続く構成となっている（東京書籍株式会社 1970：150-151）。

明治 14 年に「小学校教則綱領」が定められると、地理は、中等科から教えられることになった。内容的には、学校周辺地域の地理から入り、日本地理そして外国地理の概要を学ぶというものである。高等科では、地球や地球の表面、生物・物産等について教えることが求められた。前述の『近代教科書の変遷』によると、「小学校教則綱領」後に発行された主たる地理教科書は以下の 4 冊である。

岡谷甕谷校『地理提要』2 巻（明治 14 年）

若林虎三郎編『小学地理』 2 卷 (明治 16 年)

三橋 惇『小学輿地誌略』 3 卷 (明治 16 年)

吉田平二郎編『小学 新撰地誌』 3 卷 (明治 17 年)

アイヌに関する記述はさほど多くはないが、『小学 新撰地誌』では、「蝦夷の人」について、衣服や言語が異なるものの、近年教育がようやく行われるようになり、文字や耕作を学び始めたと紹介されている。

「土人ハ衣服、言語等自内地ト異ナリ。文字、耕作ノ法等ヲ知ラザリシガ近年教育、工藝モ。亦漸ク行ハルニ至レリ」(吉田 明治 17 年 : 23 裏)²⁷⁾

中巻・下巻で外国地理を扱っている三橋惇『小学輿地誌略』は、内田の『輿地誌略』を小学校児童向きに編集し直したもので、外国については簡単に概要を記し、残りは日本について詳しく扱っている点が『輿地誌略』と異なる(東京書籍株式会社 1970 : 153)。

『万国地誌略 首巻 地理総論』(明治 15 年)では、人種には 5 種あるとして、高加索種、蒙古種、埃地阿伯克種、馬來種、亜米利加種が挙げられており、以下のイラストが添えられている(図 4)。

『新撰地理小志 卷 1 世界』(明治 16 年)には、「日本人はみなこの種[蒙古人種または亜細亞人種]なり」(pp.6-7)としたうえで、「亜細亞は人類の始めて生育せし所」で「古代より隆盛」したという自負が確認される。「欧羅巴」の「高加索」(コーカサス)についても、「智識



図 4 小林義則『地理総論』(1882)。筑波大学附属図書館所蔵。

富み工芸巧み」と敬意を持って描写されている（p.7）。このほか、『初学地理書 巻1』（飯島半十郎）（明治17年）でもイラストとともに5種の簡単な説明が施されている。

内地居留の外国人

この頃、単なる翻訳書を脱却し、当時の日本を取り巻く外国事情や国内の社会背景を反映しようとする教科書が登場し始める。「貿易場を行き来する碧眼・赤髭の西洋人と弁髪を垂れる支那人等の人情・風俗について学ぶ」（『新撰地理小志』明治12年）ことの重要性を説くなど、地理教育に対する興味を掻き立てる内容となっている。「貿易や条約締結を交わす相手国が次々と増える」なかで、国内の貿易港の街で多くの姿が見られるようになった欧米人や中国人の気質や風俗について知識を持つべきであると、当時の日本社会に吹き込み始めた新しい風に関心を向けている。なお『萬国地誌』（明治24年）でも「横浜や神戸などの外国人の居留している」という記述がみられる。

万世一系

明治10年代は、欧米の地理書の翻訳にとどまることなく、日本独自の教育の需要に見合った教科書を作成しようとする動きが顕在化しはじめた時代である。修身など他の教科で教えられた可能性も高いが、地理教育において少数ながらも、天皇に関して明治時代、新たに構築された言説が教科書に加えられたケースがある。例えば、『新撰地理小志』（明治12年）では、「日本の天子ハ、萬世一系」という句が登場し、同年版の『輿地誌略』においても、神武天皇より123代続くと書かれている（p.29）。「万世一系」や「123代」といった「創られた伝統」を強調することにより、天皇を頂点とする国民国家形成の基盤を強固なものにしようと、地理教育においても愛国主義を導入し始めたのである。

6. 明治20年代

明治20年代は、明治国家体制が確立した近代日本のひとつの転換期と言える。明治22年（1889）に第日本帝国憲法が發布され、翌年（1890）には、第一回の帝国議会が開会、また教育勅語も公布された。日清戦争が勃発したのは（1894年）、その後間もないことである。

また明治10年代より、国家富強のための地理学を目指す動きが芽生えたとされるが、明治24年に制定された『小学校教則大綱』では、その傾向がいつそう色濃く映し出されている。とくに修身は、「尊皇愛国ノ志気ヲ養フハコトヲ努メ又国家ニ対スル責務ノ大要ヲ指示」することを強調している。日本地理と外国地理については、「大要ヲ授ケテ人民ノ生活ニ関スル重要ナル事項理會（ママ）セシメ兼ネテ愛国ノ精神ヲ養フヲ以テ要旨トス」と規定され、明治初

期とは性質を異にする愛国精神を養うことの重要性を強調する記述が目立ち始める。「地理ハ大洋大洲五帯ノ別、各大洲ノ地形、氣候、産物、人種及支那朝鮮其他本邦トノ關係ニ於テ重要ナル諸国ノ地理ノ概略ヲ授ケ」と地理教育を位置づけており、ここでも「人種」が地形・氣候・産物と同様に重要視されている。加えてやがて本格的な植民地支配を始める「支那」や「朝鮮」などでは、日本との関係で重要な諸国の地理の概略を教育することが、上記の愛国の精神を養うことにつながると考えられていた（文部省 1891）。

さらに、それ以前の「欧米の学生に課すべき書物であり、わが国の学生の為には適切なる物ではなかった」として、明治初期の翻訳書形式の万国地誌から脱却し、「日本的に学ばせる」ことを目指す『万国地誌』（明治29年）などの教科書が登場したことも注目に値する。

この時期の教科書は、再び日本地理と外国地理・万国地理にそれぞれ特化して編集されている。外国地理の教科書として主に用いられたのは、以下の通りである（東京書籍株式会社 1970: 157）。

岡村増太郎編 『明治地誌』4巻（明治25年）

學海指針社編 『萬國地理初歩』2巻（明治26年）

金港堂編 『小学校用 外国地理』1巻（明治26年）

山田行元編 『新地誌』4巻（明治26年）

『中学 万国地誌』（明治29年）では、明治初期の翻訳書形式であった万国地誌を「欧米の学生に課すべき書物であり、わが国の学生の為には適切なる物ではなかった」とした反省を踏まえて、「世界のさまざまな国について学ぶことにより、いかに我が帝国が世界の他の国よりも卓越するかを知り、またその風土を学ぶことによりその自然や風土が如何に美しいかに氣候が穏やかであるかを知る」とある（p.213）。万国地誌を学ばせる目的が、諸外国についての知識を得ることよりも、日本の卓越さを認識するために重心が移っている。こうした愛国心の育成は、『日本帝国 政治地理』（明治26年）における「我が帝国の人種はおよそ同日の血統から出自しているので日本国民という觀念においては固まっている」（p.47）といった「血統」をめぐる言説によって強化されたのである。

開化の等級（続）

明治20年代の地理教科書においても、人種と文明の開化の度合いを結びつける議論が行われた。

「五人種の中、智識發達して、解明若くは半開の域に進みたるは、欧羅巴人種と亞細亞人種とのみ。他は概子野蛮未開人たるなり」『高等小学 万国地理 全』（明治26年）

「我が日本人及び支那人は」黄色人種中「最も進歩せるもの」であり、白色人種には

「智力勝れて世界中最も勢力ある国民を成せるものあり」としている『小学萬国地誌 首巻』（明治27年：37-38）

「五種（もんごりや人種（黄色人種）、かうかしや人種（白哲人種）、亜非利加人種（黒色人種）、馬來人種（褐色人種）、亜米利加人種（銅色人種）p.36）今地球上諸國の人民の智力及び開化の有様を比較し、其進度を大別すれば開明半開未開野蠻の四階級となすべし」『小学萬国地誌 首巻』（明治27年：39）

「アーリア人種」「コーカサス人種」と「日本人」

明治20年代に入ると、明治初期のようなブルーメンバッハの5分類を中心に据えた人種分類とは異なる説が採用され始める。それが端的に現れているのは、日本人を「白色人種」の一部として「アーリア人種」を位置づける記述である²⁸⁾。この時期の教科書には、初期の翻訳書のように出典の鍵となるものが記されておらず、アーリア人種という用語や定義をどこから導入したのかは不明であるが、ヨーロッパ人種を細分化し、ヒエラルキー化する議論が活発化する19世紀後半のヨーロッパの人種学の影響を受けていたものと思われる。ちなみに、経済学者・歴史学者で衆議院議員も務めた田口卯吉が、日本人は、言語的系譜からアーリア語族に属すると主張した「日本人種論」を発表したのは明治28年のことである²⁹⁾。

明治初期の教科書では、前述の通り、日本人の文明開化の程度が相対的にどこに位置づけられるのかは概して不透明であった。ところが明治20年代に入ると、同初期のブルーメンバッハやキュヴィエを中心に据えたヨーロッパの人種学の諸説とはかけ離れた、蒙古人種や日本人の文明開化をコーカサス人種と同等だと見なす記述が目立ち始める。

「亜細亜人種、欧羅巴人種などの五種があると説明した上で」「五種ノ内欧羅巴亜細亜ノ二種ハ智識進ミテ開明或ハ半開ナレドモ、他ノ三種ハ約ネ愚昧ニシテ未開野蠻ノ民多シ」『中等教育 萬国地誌』（明治24年：20）

「こうかす人種、蒙古人種の、北温帯中に住むものは、最も開化に進みて、勢力あり、…」『新地誌』（明治26年：8）

（黄色人種中）「我が日本人及び支那人は此の人種中の最も進歩せるものなり」白色人種には「智力勝れて世界中最も勢力ある国民を成せるものあり」

『小学萬国地誌』（明治27年）、『中学外国地誌』（明治29年：27-28）

「支那、印度、波斯の如きは、上古、……文物夙に開け、近隣諸國又其化を蒙り、英雄豪傑屢々出で、…現時は、國力萎微として振はず、……。

獨り我大日本は、皇統連綿たる立憲帝政國にして、國力日に増し、文化月に進み、政軀の完備せる…」『萬國新地誌 卷之上』（明治27年、p.47）

欧米で当然視されていた白色人種対有色人種という明白な二項対立の図式を拒絶し、「コーカサス人種」と「蒙古人種」（「亜細亜人種」）を一体化させることで、それら二種と「他の三種」へと再編成された新たな解釈を披露している。あるいは『萬國新地誌』のように、支那や印度などは、過去は文明が栄えたが現在では振るわず、一方、大日本だけが唯一、連綿たる皇統と立憲帝政をもち、国力も文化も発展し続けていると、日本を黄色人種の頂点に据え、他の黄色人種とされる人々との優劣を際立てようとしている³⁰⁾。

6. 明治 30 年代

明治 33 年小学校令が再び改正され、公立小学校での義務教育が原則無償となり、就学率は 9 割に以上に達した³¹⁾。新しい小学校令によると、地理教育は高等小学校の教科として指定されたが、尋常小学校の教科からは外された。また明治 23 年の小学校令では日本地理と外国地理がそれぞれ独立した扱いとなったが、ここでは「地理」として一教科に統一された。外国地理に多くを割いたそれ以前時期とは異なり、日本地理を中心としながら、外国地理を学び、また日本との関係を主として教授することとされた。当時使用された主な教科書は以下の通りである（東京書籍 1970: 158-159）。

普及舎編『小学地理』4 巻, 明治 33 年

学海指針社編『小学地理』4 巻, 明治 33 年（上記と同内容）

文学社編『新定地理』4 巻, 明治 32 年

山上萬次郎著『外国地理』1 巻 明治 32 年

気候と文明

この頃から、外貌や言語だけではなく、気候をひとつの指標とする分類が登場したことにも注目したい。たとえば、明治 34 年『中等新地理 外國之部』のなかで、「人種の繁殖力も、又天然の知性・気候を始めとして、開明の度・個人の体格・社会の風俗習慣等によりて支配せらるる」と記述されているように、生まれつきの知性や文明の度合いなどともに、気候が人種の繁殖力を決定すると信じられていた。今回の調査では、20 年代半ばから用例が見受けられ、30 年代にはより長い記述が見受けられる。以下はその例である。

〔五種（高加索人種、蒙古人種、「エシオピア」人種、馬來人種、亜米利加人種）を挙げたのち〕
「人類の充分なる繁殖発達を遂るに最も適合する住所は、気候中和にして……暖帯地方たるは論を待たず、現に文明開化の国民大半は此帯に属する」『中等地理 地理学』（明治 24 年, pp. 53-54）中等教育 萬国地誌（明治 24 年）

「斯く人種の差異を生ぜしは、究竟各地の氣候、食物、職業、其他の事情によるなり」
（近世小地理學 外國之部）（明治 28 年）

「大陸の氣候に対して島嶼の氣候は」 「寒暑共に強からず、冬夏の溫度に著しき差異なくして、雨量豊多なる氣候」 『外国地理教科書』（明治 32 年：6-7）

熱帶地方は氣候炎熱にして、…住民の心身をして、遲緩軟弱ならしむ。…寒帶地方は…氣候寒烈なるが上に、…其の智心毫も發達せず…溫帶の住民は精神體格兩（ふたつ）ながら能く發達し、現今人類中最高等のものなり」 『中等新地理 外國之部』（明治 34 年：287）

「日本人・支那人は蒙古人種であるとした上で」 「日本人・支那人は其の繁殖力最も旺盛にして、近來漸次世界の各地に移住し、高加索人種の間に進入して、人種上の競争を試むるに至れり」 （同上、p. 289）

このように人種と氣候は密接に結び付けられ、『中等地理 地理学』や『中等教育 萬国地誌』の記述に見られるように、人類が繁殖し發達するのに最も適した氣候は、溫帶地方とされた。実際のところ文明が開化している国民の大半は、溫帶地方に属しているとし、日本が西欧やアメリカと同様、溫帶であるがゆえに、文明も開化していると主張しているのである。さらに『中等新地理 外國之部』では、日本人・支那人の繁殖力の強さを説き、その結果世界各地へ海外移住したと説明している。同時に、欧米人を意識しながら、コーカサス人種に対して「人種上の競争」を挑んでいるかのごとき記述も見られる。

帝国支配とマイノリティ

日清戦争（1894-1895）で日本が勝利した後の明治 30 年代、高揚するナショナリズムと大和民族優位思想は、帝国支配下に置いていたアイヌ、琉球、台湾の人々についての記述においても顕在化する。明治 34 年『中学本邦地理教科書』では、

「本邦の住民は一般に黄色人種に屬するものなれども、言語・風俗・性質・容兒等により次きの如き五種族に區別することを得べし。大和種・琉球種・アイヌ種・漢種、臺灣種是なり」（p. 26）と記述されており、人種は黄色人種として同じだが、言語や風習、性質、容貌によって 5 つの種族に区分できるとされた。

その上で「大和種」については、「此種族は性質勇敢なれども容兒は溫和に、思想は優美にして又技術工藝に長ずるのみならず、忠君愛國の精神に富む」（pp. 26-27）と賞賛する一方で、「臺灣蕃種」に関しては、対照的に、「其風俗習慣等支那人と大差なく、生蕃は凶暴殺伐なるもの多し」（p. 28）とあり、「アイヌ種」に対しては、「性質勇猛なれども、又魯鈍蒙昧にして、寧ろ憐むべきの種族なり」（p. 27）といった蔑視を露わにしている。

『中等小地理 本邦之部』（明治33年）には、大和種族とともに、アイヌや台湾・琉球の人々についての言及も見られる。

「大和種族の勢力強大にして、他の種族は、悉く是に歸服し、其因襲の久しき、後には、殆ど同一の種族たるが如くに成れり。…アイヌ人は、大和種族の繁殖するに従ひ、漸く東北方に退去して、今は、北海道の山谷に僅に其種族を存せるのみ。臺灣及び琉球の住民は、大和種族とは自ら別種なれども、精密にこれを觀察すれば、其源は同一なるが如し。」

また大和種族についてはさらにこう続ける。「大和種族の性質は、活潑敏捷にして、忠孝を重じ、皇室を尊崇する念極て深く、勇武の氣象に富み、學藝に長じ、清潔を好めり。是れ決して我國人の自ら然りと云へるにあらず、外國人もまた之を稱する所なり。」『中等小地理 本邦之部』（明治33年）（pp.17-18）

このように、当時帝国支配した台湾や琉球、アイヌの人々は、勢力の強い大和種族とは別種であるとした上で、他の種族は大和種族に従い、因習を変えてほとんど同じ種族のようになったと解釈している。

中学本邦地理教科書（明治34年）では、「本邦の住民は一般に黄色人種に屬するとした上で、「言語・風俗・性質・容兒等により次きの如き五種族に區別することを得べしとして、「大和種・琉球種・アイヌ種・漢種、臺灣種是なり」と述べる。すなわち、人種は同じであるが、言語や風俗、容兒等により、「種」が異なるとして、種を人種の下位概念に据えている。

さらに、「大和種」については、「此種族は性質勇敢なれども容兒は溫和に、思想は優美にして又技術工藝に長ずるのみならず、忠君愛國の精神に富むと同時に、忍耐力に乏しく、且規模狭小にして小康に安するの性あるを免れざる者の如し」とし、他方「琉球種」は、「人種學上全く別人種なるや否や未だ詳かならず」とその分類を留保し、「アイヌ種」については、「性質勇猛なれども、又魯鈍蒙昧にして、寧ろ憐むべきの種族なり」、また「漢種」は「臺灣に住居し、重に明時代の頃に福建及廣東地方より移住し來りしものなり」「臺灣蕃種」は「其風俗習慣等支那人と大差なく、生蕃は凶暴殺伐なるものも多し」と、現地住民への著しい偏見を露呈している（『中学本邦地理教科書』（明治34年））。

普通教育地理學教科書の地理學通論では、「インドゲルマニ種族」は「文明の程度最も進歩せる種族なり」とし、他方、蒙古人種は、「此人種は其固有の文明を以て一時大に發達したれど、今日にては遂にカウカシア人種に一步を譲らざるべからざる地位に立ち…吾人大和民族は亦此人種に屬するものなり」と、コーカシア人種の優位性を認めている。他方、アフリカ人種については、「其アフリカにあるものは、文明の程度最も劣等にして、其大部分は未開に屬すれども、其アメリカにあるものは相應の教育を受け、種々の生業を有するもの、尠しとせず」として、最も文明の遅れた人種として時間軸の底辺に位置づけている（普通教育地理學教科書『地理學通論』明治36年）。

このように、文明を優劣に段階分けするという明治初期に輸入した学知を、日本帝国内におけるマイノリティ支配の正当化のための学知へと転換していくのである³²⁾。

8. 明治 40 年代

この時代に目立って新しい傾向は見いだせないが、『高等地理 欧羅巴洲之部』（明治 43 年）で注目したいのは、「高加索人種」の中にさらに 4 大部族の分類があるという認識である。「高加索人種」の 4 大部（族）への分類があるとし、そのなかでも

西班牙、葡萄牙、希臘等の諸國民は 體格一般に薄弱なれど、の中央欧羅巴及北欧羅巴の諸國民は體格強壯、美貌美麗、顔色鋭敏、毛髮柔軟なるを以て特性となす... 日耳曼族、即ちチュートン族は、... 優等人民の位置を占む近世に於ける歐洲ノ科學的進歩は此種族の力に依るもの多し（pp.53-54）

と記している。すなわち明治 43 年（1910）の時点で、ウィリアム・リブリーによる『ヨーロッパの諸人種』（*The Races of Europe: A Sociological Study* 1899）をはじめとする「ヨーロッパ人種」内の細分類に関する議論が早くも紹介されていたことを意味する³³⁾。

「民族」

「民族」という言葉は、明治前期の地理の教科書にはほとんど見当たらないが、明治 36 年の『地理学通論』において、「吾人大和民族は亦此人種[蒙古人種]に屬するものなり」（p.17）として登場する。

また「大和種族」という用語も用いられており、例えば明治 33 年『中等小地理 本邦の部』では、「大和種族の性質は、活潑敏捷にして、忠孝を重じ、皇室を尊崇する念極て深く、勇武の氣象に富み、學藝に長じ、清潔を好み。... 外國人もまた之を稱する所なり」（p.18）と皇室への尊崇を持ち出しつつ、その優等性を論じており、時代性を反映している。

お わ り に

本稿では、幕末から明治時代末までの地理教科書・地理書、とくに万国地誌等の外国に関する教科書における人種や関連用語の記述について検証してきた。本研究ノートが明らかにしたのは、海外地理に関する教科書の役割や記述内容が、明治初期の頃は輸入学問により近かったものが、同中期から日本の帝國的拡大とともに変遷していったことである。

幕末から明治維新直後にかけて知識人は、西洋諸国の勢力拡大の餌食となることを是が非でも回避しなければならないという焦燥感を募らせていた。彼らは留学や旅行によって得た海外事情の知識を、日本の幅広い人民に知らしめることが急務であると考えており、執筆した教科書の中でとりわけ重点的に扱ったのが、人種であった。明治新政府の下、教育制度が整えられると、欧米の一般的な教科書や啓蒙書に基づく翻訳書が教科書として充てがわれた。

対外交渉を制限していた江戸時代の遅れを挽回せんとするかのごとく、地球上に住む人類はどのように分類され、それをどう呼ぶのか、どのような容貌や気質の人々がどの地域にどのくらいの数住み、どのような生活様式を営んでいるのか、その文明の程度はいかなるものか、といった事項に関する記述が各外国地理の教科書本文の最初に位置づけられた。実際、尋常小学校におけるあらゆる教科のなかで、過当たりりもっとも多くの時間が割かれた教科の一つが地理だったのである。これらの教科書においてとりわけ重点的に扱われたのが、人種であり、言語や宗教がそれに続いた。こうした構成による明治初期の外国地理教育は、世界に対する関心の広がりに応えるものであり、そのまま近代日本の世界観構築の基盤を築いたと言えよう。

文明開化という新しい国是の達成を急ぐなかで、地理学者や文部省関係者らがもっとも関心を注いだ内容の一つが、人種の優劣と同列に論じられた「文明の等級」であった。明治初期は、翻訳を通して欧米の人種ヒエラルキーを無批判に受容していたといえる。野蛮で文字さえ持たぬアフリカやオーストラリアの土人と、すでに文明開化を達成しているヨーロッパやアメリカのコカサス人種の間には、大きな等級の開きがある、さらに未開と半未開もまたそれぞれ異なった等級である、と紹介していた。

しかし、「其他の文明国」については、どの原著から翻訳したものなのか、あるいは翻訳者が何らかの理由で付け加えたものなのか否かは、現時点では不明である。少なくとも、主たる原典として挙げられている書物には見当たらないことから、たとえこの部分が何らかの洋書の記述から翻訳したものであれ、「其他の文明国」の追加が意図的に行われた可能性が高いことは指摘できるであろう。「日本」の名は挙げられていない。しかし、支那が半開であり、欧米が文明開化であるならば、あるいは憲法の存在や君主による土地の非私有化が「其他の文明国」を定義づけていたことから、「其他の文明国」とはまさに日本を暗示していたのではないだろうか。その時点で文明国と断言するには至ってはいなくとも、文明国に達成する日は目の前である、すべては国民の営為次第である、そうした含みをもたせる項目であると解釈することも可能なはずである。

明治20年代になると、日本人がモンゴロイド（蒙古人種）であるとする記述は多くの地理の教科書で見受けられる。それと同時に、日本の温暖な気候がその文明に及ぼす影響や日本人の優越性を認識させようとする記述も台頭し始める。これらの記述においては、「白色人種」対「有色人種」という欧米での二分法は、いつしか日本では、「白色人種+蒙古人種」対「その

他」，あるいは「白色人種+支那と日本」対「その他」となっていく。

また明治 30 年代，日本が日清戦争で勝利し，日本の周辺の少数集団の植民地化が進むにつれて，「日本民族」「大和族」の優秀性と，アイヌや琉球，台湾の先住民などの凶暴性や蒙昧性が対比されるようになった。

明治初期，まだ教科書が少なかった時代に関しては，個別の書物の重要性をある程度確認できたが，時代が下がるにつれ，教科書の種類も増えたために，個々の書物の流用度や影響力，著者の背景までは把握しきれていない。また翻訳書の原著や実際に翻訳に使われた版のすべてを正確に特定できたわけではなく，その意味でこの検証が限界を伴うことは否めない。そうした限界はあるものの，この時期，外国地理に関する教科書の役割や記述内容が，それぞれの時代における日本の歩みとともに変容していった様子が明らかとなった。

幕末・明治期にかけては，「人種」や「種」，そしてその後に登場する「民族」という概念は，常に欧米とアジアを意識した地政学のなかでこそ意味をもっていた。それらの概念は，諸外国と日本との力関係を測り，白人と同等の文明の程度であると刷り込むために用いられた。他方，皇室や日本人の血統の言説を持ち出して国民や民族意識を高揚させつつ，アジアの他地域や周辺少数民族に対する植民地支配を強化していくための中心的ツールのひとつであったと言える。

むしろ関連するすべての地理教科書がこの方向に歩みを揃えて日本人の優越性を謳っていたわけではない。一方では，依然として欧米の人種理論の影響が大きく，白人に対して日本人が人種的に劣性であるという欧米の言説が無批判に受容されている側面もあった。しかし，白人至上主義に対する懐疑が生まれ始めたのも明治中期からであった。つまり，日本が著しい経済的發展を遂げ，国家的な自信を獲得しつつあり，日本人の優越性を論じる知識人や科学者も現れ始めたからである。そして，欧米の人種理論による人種的劣等観と白人至上主義への懐疑のはざまで，日本は欧化と脱欧化の間でゆらぎを見せ始めていた。

欧米から導入された「人種」は，文明の諸段階と関係づけて解釈されながら，日本の帝國的拡大によって特徴的な変容を遂げた。つまり，「人種」は非身体的な，目ではとらえられない指標になったのだ。その指標の最高等級は，日本人にとっても達成可能であるとする解釈が加えられた。皮膚の色や頭蓋骨の形状は，大西洋の向こう側では植民地主義を正統化するために用いられる可視的で本質的な指標であったのだが，日本では同じ意味をもつことは決してなかったのである。

* 本研究は，日本学術振興会による科学研究費（S）「人種化のプロセスとメカニズムに関する複合的研究」（領域番号 16H06320）の助成を受けたものである。

註

- 1) 竹沢泰子「明治期の人種・民族に関する教科書記述」(仮題) 竹沢泰子, フレデリック・ショブ編『人種主義と反人種主義の越境と転換』(仮題) (2021 年京都大学学術出版会より刊行予定) に掲載予定。
- 2) 本稿は, Yasuko Takezawa “Translating and Transforming ‘Race’: Early Meiji Period Textbooks,” *Japanese Studies* 35(1), p. 5-21, 2015) を基にしつつ, 大幅に加筆したものである。筆者が東京高等師範学校の後身である筑波大学で勤務していた 1990 年代から現在にいたるまでの間に, 筑波大学貴重書コレクション, また京都大学附属図書館, 教科書研究センター (在東京都), 国立国会図書館近代デジタルコレクション等で集めた資料に基づいている。漢語検索にあたっては, 人文科学研究所研究員 (検索当時) の望月直人さんおよび松島隆真さんにご協力頂いた。
- 4) その例として, 坂野徹 (2005), 奥那興潤 (2003)。これらはいずれも秀逸した研究ではあるが, 主として知識人の言説に基づいている点で, 本稿と異なる。日本の人類学者らの書き物に今日的意味での「人種」が登場するのが数十年単位で遅れたとするならば, 知識人の学問的関心を集めるまでそれだけ長い時間を要したということかもしれない。
- 5) 『世界都路』明治 5 年では, アフリカについての記述に関して「赤道黒夷の人種 (ひとくさ)」と, 「人種」に「ひとくさ」のルビがついている。
- 6) 明治 6 年 4 月頃から各府県で実施に移された。
- 7) 当時の教科書は決して廉価なものではなかった。たとえば明治 8 年当時, 福澤諭吉『世界図尽』は, 3 冊で 1 円 25 銭, 師範学校『地理初歩』は, 1 冊で 3 銭 2 厘, 明治 13 年当時の千葉県小学校教員の給与が 1 ヶ月 4 円, 巡査の初任給が 6 円であったことから, 教科書が高価なものであったといえる。したがってすべての児童生徒が教科書を所有していたわけではなく, 教科書を写したり, 兄弟姉妹で使い回しをしたり, 学校から借用したりする例も稀ではなかった (中村 1992: 60-73)。
- 8) 文部省「小学教則概表」(明治 5 年 11 月 10 日文部省布達番外) http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318006.htm
- 9) このほか, 東京書籍の社史である『教科書の変遷 —— 東京書籍五十年の歩み ——』(1959) には, 上記のほか, 当時の主な世界地理書として以下の書籍が挙げられている。西村恒方訳『万国地理訓蒙』3 巻 (明治 5 年 / 1872) 望月誠訳『万国地理啓蒙』4 巻 (明治 6 年 / 1873), 兵藤圭造訳『兵要万国地理小誌』5 巻 (明治 9 年 / 1876) である (東京書籍株式会社 社史編集委員会: 147)。
- 10) 第 1 巻の冒頭にも, 同様の記述がなされている。(ただし 5 種については, それに続く形で言及)
- 11) フランスの雑誌, *Tour du Monde: nouveau journal des voyages* を指すと思われる。
- 12) 全 3 巻は, 第 1 巻『人種の区別を含む総論と亜細亞州』, 第 2 巻『欧羅巴州』, 第 3 巻『阿弗利加州』, 北亞米利加, 南亞米利加, 大洋州で構成されている。
- 13) 師範学校の編集により文部省が刊行した官版教科書『万国地誌略』が, 外国地理書として全国に最も普及した。
- 14) 『小学読本』は, 明治 7 年に改正版が発行され, 不自然な翻訳が日本語の文体に合うよう修正された (中村 1984: 58)。
- 15) 第 1 巻の 1 頁の亜細亞総論では, アジア全体の地理について概要が書かれており, 続いて, 支那, 西比利亞 (シベリア) と国別の概要が続くが, ここでも, 日本については, 日本地理略に詳

細に記してあるので、省略すると断っている(1874: 1)。

- 16) この時期の翻訳書には通常、著者名のみ凡例か緒言で記されている。それ以外の情報については、翻訳書の出版年や書籍の構成等から書名、版、出版年を可能な限り特定した。
- 17) 翻訳書より早く刊行され、教師用に作成された Alexandor Mackay による *Manual of Modern Geography, Mathematical, Physical, and Political* (1861) である可能性が高い。石山洋 (1967) も参照。
- 18) 1821 年版、出版年不詳（出版社が経営を続けていた 1834 年から 1842 年の間）、および 1851 年版。
- 19) 日本語の「部族」という言葉の使用には慎重でありたいが、ここでは当時の視点からあえてこの言葉で翻訳した。
- 20) ここで civilized に加えて enlightened を独立に設けており、それぞれについて、以下の通り定義している。

Civilized nations are those that engage in commerce, practice the art of writing, have made considerable progress in knowledge and morality.

Enlightened nations are those civilized nations that possess a thorough division of labor, have established general systems of education, and have made the greatest progress in knowledge and morality.

そのすぐ下の中で

The enlightened and civilized nations are nearly all Caucasian.とある (p. 18)。
- 21) チェンバーズ兄弟が設立したチェンバーズ社は数々の啓蒙書シリーズを出版しているが、1835 年から本格的に刊行が開始された「チェンバーズ教育叢書」(Chambers' Educational Course)などの啓蒙書は、福澤諭吉の『西洋事情外編』(慶応 3 年)や『童蒙教草』(明治 5 年)をはじめ、幕末・明治初期の欧米の科学・文化知識に強い関心を抱いていた知識人の重要な手引きとなっていた。
- 22) 石川禎浩は、アメリカ版人類篇の原典は、*Chambers's Information for the People*, new and improved edition, 2 vols., (Philadelphia: J. B. Lippincott & Co., 1867) だと断定している (石川 2013: 300)。
- 23) 皮膚の色については、その後の「黄色」という言説とは異なり、ブルーメンバッハの説に比較的に忠実な、a sallow or olive tint, and in some cases early yellow といった表現で表されている。また [T]he Fins and Laplanders” “The Turkish and Mongol Tartar tribes” “The Esquimaux” といった populations について言及されている (p. 4)。
- 24) 前述の通り、どの版を使用したかを特定する手がかりは見いだせないが、いずれの版であっても、原典の特定の版に存在していた蒙古人種に該当する国民や集団が、ひとつしか版のない日本語版では省略されていたという事実から、筆者の主張が揺らぐ可能性はないと考えている。
- 25) 支那に関する独立したセクションでは、人種は蒙古種であると明記している。日本については、「日本ノ西北二位シ」(「日本の西北に位置し」)とあくまでも中国を客体化したなかで登場するのみである (P. 15)。支那の後には、西比利亞^{シベリア}、印度と続き、日本について言及があるのは、この巻の最後、琉球が日本の所轄であると記している程度であり、単独での説明は省略されている。
- 26) このほか、名誉 (pride) を重んじることが自殺 (切腹) 等との関連で紹介されている。
- 27) 吉田の名前の表記については、東京書籍株式会社 (1970) では、吉田平治郎となっており、田中耕三 (1988) では、吉田三平と誤って記載されているが、原著を確認したところ、吉田平二郎

の表記が正しい。

- 28) 『中等教育 如氏地理教科書』(明治 21 年)では、「アリアン」は、「亜細亜ノ中央ヨリ、民族ノ四方ニ移住セシハ」(p.150)という説明書きが加えられ、明治 29 年『萬國地誌』にも「ありあ人種」が登場する。
- 29) 田口卯吉 「日本人種論」『楽天録』明治 28 年。田口卯吉「国語学より観察したる人種の初代」『史学雑誌』明治 34 年。
- 30) 以上のほか、『中等地理萬國誌』(明治 25 年)『近世小地理學 外國之部』(明治 28 年)『小学外国地理 全』(明治 29 年)『中学外国地誌 全』(明治 29 年)『中学 萬國地誌 上巻』(明治 29 年)においても、「人種」に関する記述が見られる。一部は人種に加えて「種」も併記している。
- 31) 「明治の学び」 国立公文書館
http://www.archives.go.jp/exhibition/digital/meiji/contents3_04/
- 32) 明治 30 年代には、以上のほか、『普通教育地理學教科書 地理學通論』(明治 36 年)『地理教科書: 外國 三』(明治 37 年)、『外国新地理』(明治 38 年)においても人種に関する記述が見受けられる。
- 33) 明治 40 年代には、このほか、『中等地文学』(明治 42 年)、『最近 統合外国地図』(明治 44 年)にも、人種に関する記述がある。

参考文献

- 秋山恒太郎 訳 1874 『百科全書 人種篇』東京: 文部省
- 有本良彦 1966 「戦前・地理教育の分析」, 教育科学研究会・社会科部会『社会科教育の理論』東京: 麦書房
- 飯島半十郎 編 1884 『初学地理書』東京: 吉川半七
- 石川松太郎 1988 『往来物の成立と展開』東京: 雄松堂出版
- 石川禎浩 2013 「近代日中の翻訳百科事典について」, 石川禎浩・狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都: 京都大学人文科学研究所附属現代中国研究センター
- 石山洋 1967 「内田正雄『興地誌略』の成立」日本英学史研究会研究報告, 71 号: pp.6-11 (https://www.jstage.jst.go.jp/article/jeiken1964/1967/71/1967_71_6/_pdf/-char/ja)
- Grammar of Geography for the Use of Schools, With Maps and Illustrations.* London: William Tegg)
- 内田正雄 編 1875 『興地誌略』東京: 中村熊次郎, 小林新兵衛(発行者)
- 内田正雄 編 1876 『興地誌略』東京: 文部省
- 内田正雄 編 1882 『興地誌略』東京: 明善堂
- 内田正雄 編訳 西村茂樹編 1880 『興地誌略』東京: 文部省
- 大槻修二 編 1889 『改正 日本地誌要略』大阪: 溪梅香風館
- 小野正美, 村木渙 1902-1903 『中等 新地理』東京: 六盟館
- 海後宗臣編 1965 「所収教科書解題」『日本教科書体系 近代編 第 15 巻 地理』東京: 講談社, pp.622-632.
- 海後宗臣 1966 「地理教科書総解説」, 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編 第 17 巻 地理 (3)』東京: 講談社, pp.577-630.

- 片山平三郎 譯 1882 『地文學初歩』東京：宕陽堂
- 仮名垣魯文 1872 『世界都路 卷1～卷7』東京：万笈閣
- 加藤周一 1991 「明治初期の翻訳」加藤周一、丸山真男編『翻訳の思想』東京：岩波書店，pp. 342-380.
- 唐澤富太郎 1956 『教科書の歴史 —— 教科書と日本人の形成 ——』東京：創文社
- 管野虎太 譯 1874 『萬國地誌略』東京：養賢堂
- 菊池重郎 1969 「文部省における「百科全書」刊行の経緯について（文部省刊行の百科全書「建築学」に関する研究・その1）」『日本建築学会論文報告集第』61：pp. 112-119.
- 木全清博 2006a 「地理教科書」，滋賀大学付属図書館編『近代日本の教科書のあゆみ —— 明治期から現代まで ——』彦根：サンライズ出版株式会社，pp. 50-58.
- 木全清博 2006b 「社会科教育」，滋賀大学付属図書館編『近代日本の教科書のあゆみ —— 明治期から現代まで ——』彦根：サンライズ出版株式会社，pp. 143-154.
- 木全清博 2006c 「近現代日本教科書史の略年表」，滋賀大学付属図書館編『近代日本の教科書のあゆみ —— 明治期から現代まで ——』彦根：サンライズ出版株式会社，pp. 255-262.
- 金港堂書籍会社編輯所 1894 『小学万国地誌』東京：金港堂書籍
- 小宮山弘道 編纂 1880 『地文学読本』東京：犬飼巖磨
- コルタンブル 1872 『地球産物雑誌』堀川建斎訳，東京：和泉屋半兵衛
- コルタムペール 1875 『地誌小成』土屋正朝訳，奈良：柳水堂
- 坂野徹 2005 『帝国日本と人類学者』東京：勁草書房
- 坂元ひろ子 2005 「中国史上の人種概念をめぐって」竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う』東京：人文書院，pp. 182-191.
- 佐藤傳藏 編 1901 『中学本邦地理教科書』東京：六盟館
- 佐藤傳藏 編 1909 『中等地文学』六盟館
- 佐藤昌介、植手通有、山口宗之 1971 『日本思想大系 55 渡邊崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本左内』東京：岩波書店
- 佐藤昌介 1971 「渡邊崋山と高野長英」佐藤昌介、植手通有、山口宗之校注『渡邊崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本左内 日本思想体系 55』東京：岩波書店，pp. 607-651.
- 三省堂 編 1899 『外国地理教科書』東京：三省堂
- 師範学校 1874 『万国地誌略 1 卷』東京：文部省
- 師範学校 編 1875 『日本地誌略 卷之一』鳥取：龍淵堂
- 澁江保 1893 『高等小学萬國地理』東京：博文館
- 須川賢久 1877 『万国地理誌 卷之一』須川賢久訳 東京：須川賢久
- 関藤成緒 1882 『百科全書 地文學』東京：文部省
- 高木與五郎 編 1894 『萬國新地誌 卷之上』東京：四書堂
- 高橋二郎 1874 『啓蒙日本雑誌』出版地不明：墨山書屋
- 高橋義雄 1884 『日本人種改良論』東京：石川半次郎 発行
- 田口卯吉 1901 「国語学より観察したる人種の初代」，『史学雑誌』12(6)：pp. 1-28.
- 田口卯吉 1898 「日本人種論」，田口卯吉『楽天録』経済雑誌，pp. 137-150.
- 田中耕三 1988 「明治前半期の地図教育の実践に関する史的研究」『新地理』36(2)：pp. 1-15.
(https://www.jstage.jst.go.jp/article/newgeo1952/36/2/36_2_1/_pdf)
- 田中義廉 編 1873 『小学読本』東京：金港堂

- 地理研究会 編纂 1913 『新地理 中学校用概説之部』東京：文學社
- 津久井遠 編 1877 『訓蒙寶字要略 上巻』東京：津久井遠 発行
- 東京書籍株式会社 社史編集委員会 1970 『近代教科書の変遷 東京書籍七十年史』東京書籍株式会社
- 仲新・稲垣忠彦・佐藤秀夫 編 1982 『近代日本 教科書教授法 資料集成 第3巻』東京：東京書籍株式会社
- 中川浩一 1978 『近代地理教育の源流』東京：古今書院
- 中川眞弥 編 2002 『福澤諭吉著作集 第二巻』東京：慶應義塾大学出版会
- 中村紀久二 1982 「国定教科書の歴史」,『復刻 国定教科書（国民学校期）解説』東京：ほるぷ出版
- 中村紀久二（元版はペンネーム中村圭吾で発行）1984 『教科書物語 —— 国家と教科書と民衆』東京：ほるぷ教育開発研究所
- 中村紀久二 1992 『教科書の社会史 —— 明治維新から敗戦まで ——』東京：岩波書店
- 中村五六編 1891 『中等地理 地理学 日本地誌』東京：文学社
- 秦政治郎 1891 『中等教育 万国地誌』東京：博文館
- 福澤諭吉 1866 『西洋事情』東京：尚古堂
- 福澤諭吉 訳述 1869 『頭書大全 世界國盡 一 亜細亞洲』東京：慶應義塾出版局
- 福澤諭吉 1970 「内地雑居の喜憂」『福澤諭吉全集 第9巻』東京：岩波書店, pp. 401-408.
- 福澤諭吉 2002 「世界国尽」, 中川眞弥編『福澤諭吉著作集 第2巻』東京：慶應義塾大学出版会
- 富士谷孝雄 1888-1890 『中等教育 如氏地理教科書 第一帙』内田老鶴圃 発行
- 文学社編輯所編 1900 『中等小地理 本邦之部』東京：文学社
- コーネル 1877 『地形論 全四巻』帆足義兼訳, 東京：山本榮次郎, 土屋忠兵衛, 須原屋茂兵衛, 和泉屋市兵衛, 山形屋半次郎 発行
- 牧健二 1968 『西洋人の見た日本史』京都：清水弘文堂
- 増野恵子 2006 「見える民族・見えない民族 『輿地誌略』の世界観」神奈川大学 21 世紀 COE プログラム「人類文化研究のための非文字資料体系化」編 『版画と写真：19 世紀後半 出来事とイメージの創出』横浜, pp. 49-59
- 松川安信編 1874 『世界新名数 初編 2』大阪：松雲堂。
- 松永俊男 2005 「チェンバーズ『インフォメーション』と文部省『百科全書』について」, チェンバーズ編『インフォメーション・フォー・ザ・ピープル Chambers's Information for the People 別冊日本語解説』豊中：有限会社ユーリカ・プレス
- 松山棟菴訳 1870 『地學事始 上・中・下』慶應義塾出版局
- ミッチェル 1888 『萬國地誌階梯』松村精一郎 訳, 東京：江島伊兵衛 発行
- 源昌久 1997 「福澤諭吉著『世界国尽』に関する一研究 書誌学的調査」『空間・社会・地理思想』2: pp. 2-18
- 文部省 1891 『小学校教則大綱』東京：文部省（抄録は, http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318015.html 参照）
- 文部省編 1985 『文部省百科全書 12（衣服及腹式・人種・言語・交際及政体）』東京：青史社
- 矢津昌永編 1893 『日本帝国 政治地理』東京：丸善商社
- 矢津昌永 1896 『中学 萬國地誌』東京：丸善商社
- 山崎直方 1903 『地理学教科書 —— 普通教育 地理学通論』東京：東京開成館

- 山田堯扶 1881 『啓蒙地文學』 東京：弘文社
山田行元編 1879 『新撰地理小志』 東京：香風館
山田行元編 1884 『新撰地理小志』 山田仙出版
山田行元編 1891 『新撰中地理書 上巻』 東京：会桔堂
山田行元 1893 『新地誌』 上原才一郎 発行
尹健次 1994 『民族幻想の蹉跎——日本人の自己像』 東京：岩波書店
吉田平二郎編 1884 『小學 新撰地誌 全三巻』 京都：杉本甚介 発行
奥那覇潤 2003 「近代日本における『人種』観念の変容——坪井正五郎の『人類学』との関わりを中心に」『民族学研究』63（1）：pp.85-97.
渡辺崋山 1971[1838] 『慎機論』, 佐藤昌介, 植手通有, 山口宗之 校注 『渡辺崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本佐内 日本思想体系 55』 東京：岩波書店
渡辺崋山 1971[1839] 『外国事情書』, 佐藤昌介, 植手通有, 山口宗之 校注 『渡辺崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本佐内 日本思想体系 55』 東京：岩波書店
渡辺崋山 1971[1839] 『再稿西洋事情書』, 佐藤昌介, 植手通有, 山口宗之 校注 『渡辺崋山 高野長英 佐久間象山 横井小楠 橋本佐内 日本思想体系 55』 東京：岩波書店
国文学研究資料館編 2005[1871] 『万国往来』 東京：平凡社

- Chambers, William and Robert Chambers, 1867. *Chambers's Information for the People: New and Improved Edition*. Philadelphia: J. B. Lippincott & Co.
Cornell, S. S. 1860. *High School Geography*. New York: D. Appleton & Co.
Goldsmith, J. and Webster W., 1868. *A Grammar of Geography for the Use of Schools, with the Maps and Illustrations*. London: William Tegg.
Harper, Ritter and Humbolt Harper, 1886. *Harper's School Geography with Maps and Illustrations*. New York: Harper & Brothers.
Mackay, Alexander Murdoch. 1861. *Manual of Modern Geography Mathematical, Physical, and Political*. Edirburgh and London: William Blackwood and Sons.
Mitchell, S. Augustus, 1840. *Mitchell's Geographical Reader: A System of Modern Geography, Comprising a Description of the World, with its Grand Divisions, America, Europe, Asia, Africa, and Oceanica*. Philadelphia: Thomas, Cowperthwait & Co.
Ripley, William Z. 1899. *The Races of Europe: A Sociological Study*. New York: D. Appleton and Company.
Takezawa, Yasuko. 2015. "Translating and Transforming 'Race': Early Meiji Period Textbooks," *Japanese Studies* 35(1), pp. 5-21.

要 旨

本研究ノートでは、明治時代の地理科目の教科書にみられる「人種」「民族」「種」および日本帝国内のマイノリティ集団に関する記述を時代系列にしたがって検証する。現在でも日本の一部の教科書や事典などにおいて使用され続けている「コーカソイド」「モンゴロイド」や「白色人種」「黄色人種」「黒色人種」という人類の分類方法は、19世紀江戸後期から明治初期にかけて科学知として日本に導入されたものである。前者はドイツ人のヨハン・F・ブルーメンバッハが、後者はフランス人のジョルジュ・キュヴィエが発案した人種区分であった。皮膚の色など可視的な身体形質で人類を分類する「人種」という新しい概念が、ヨーロッパやアメリカから日本に越境し、変容を見せながら定着することになった。初期は、海外の教科書を翻訳したものが主を占め、白人をヒエラルキーの頂点においたが、それらのなかには次第に日本の国民国家と帝国形成のなかで、その分類方法や意味づけを大きく変え、日本人（大和民族）をヨーロッパ人種と同等に優れていると位置付けるものも現れた。「人種」と、それと不可分な関係をもつ「民族」は、日本の文明開化、「脱亜入欧」、その後のアジアにおける帝国支配において、内政においても対外政策においても重要な役割を果たしていた。

キーワード：人種、民族、植民地主義、教科書、明治時代

Abstract

This paper will examine the descriptions in geography textbooks of “jinshu,” “minzoku,” “shu,” and minoritized groups in Imperial Japan during the Meiji Period (1868-1912). The terminology such as “Caucasoid,” “Mongoloid,” and “Negroid,” or “White Race,” “Yellow Race,” and “Black Race,” which are still used in some school textbooks and encyclopedias, was introduced to Japan during the late Edo and the early Meiji periods. The former categories trace their origin to Johan F. Blumenbach, a German anthropologist, and the latter division was invented by Georges Cuvie, a French naturalist. While in the early Meiji period, most descriptions heavily relied on textbooks used in Europe and the United States, as Japan advanced its nation-building and Empire formation, new interpretations and descriptions that positioned Japanese as equally superior as the European Race came to appear in some textbooks. “Jinshu” and “Minzoku” placed a vital role in Japan’s project to “civilize” itself, its valorization of a “Leave Asia and Join Europe” orientation, and the pursuit of Imperialism both within and outside Japan.

Keywords : race, ethnicity, colonialism, textbook, Meiji period